

153. 野洲町下々塚遺跡出土の 平安時代遺物について

1. はじめに

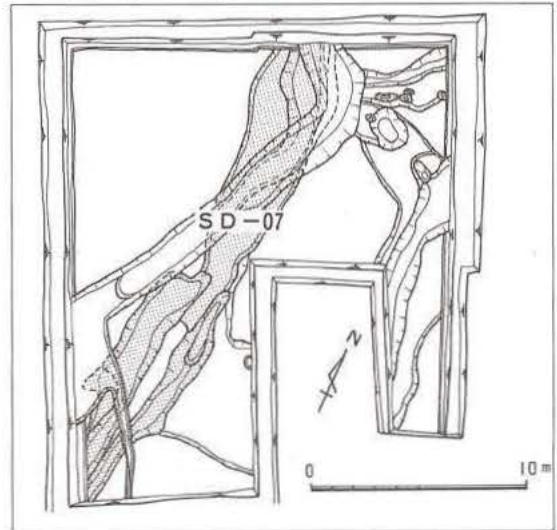
下々塚遺跡の発掘調査は、昭和49年以降断続的に実施されており、このうち昭和54年に実施された野洲病院増築に伴う発掘調査と、昭和58年に実施された字下々塚1141-1番地の二つの調査において、弥生時代中期から古墳時代後期に至る遺構、遺物が多数検出されたため、以後当該遺跡は弥生時代～古墳時代の集落遺跡として周知されている。一方下々塚遺跡は、古代東山道を挟んで野洲郡衙推定地である小篠原遺跡の南側に隣接しているが、これまでに実施された発掘調査では歴史時代の遺構・遺物に関する資料は稀少であった。しかし、ここ数年の調査では徐々にながらこの時期の資料も増加している。特に昭和61年に実施された字下々塚1113番地の調査では、従来良好な資料に乏しかった9世紀～11世紀の遺物が多数出土している点で注目される。中でも溝状遺構SD-07出土の土器群は遺物量も多く、この時期の器種組成を検討し得る好資料である。以下にSD-07出土遺物について内業整理の進展に伴い、若干の資料紹介を試みたい。



第1図 遺跡位置図

2. 調査概要

調査地は、野洲病院の西側、主要地方道大津能登川長浜線に面した、大字小篠原字下々塚1113-1番地に所在する。調査は店舗用地造成に伴うもので、対象面積は681㎡と小規模である。周辺の旧地形は、現況からは計り得ないが、過去の発掘調査時における知見より、本調査地の西側、行事神社に至る間に、南北にのびる旧河道が想定される。本調査地の遺構面においても、西側に向かって若干の緩傾斜が認められる。また推定東山道は、家屋一軒分を挟んで、本調査地の北西側30m付近を通過している。調査の結果、古墳時代～平安時代に至る3面の遺構面が確認されている。第1遺構面からは、平安時代後期の溝が数条検出されている。第2遺構面からは、平安時代前期～中期の溝群が、重複して多数検出されている。第3遺構面からは、古墳時代初頭の竪穴住居2棟、古墳時代後期の溝数条が検出されている。このうちSD-07は、第2遺構面で検出された溝群の一つである。SD-07は、調査地を斜交して南北にのびる溝で、南側は二条の小溝に分枝している。北側の溝幅は最大2.5m～3m、深さ0.2mの規模を測る。遺物の大半は、中央より北側で出土している。遺物の出土状況は、狭い区域に限定され、かつ完形品が多く個体の損壊が少ないことから、比較的短い期間に投棄され、埋没したものと推定される。



第2図 遺構平面図

3. SD-07出土遺物について

SD-07からは、主に土器からなる遺物が、遺物収納用コンテナで約10箱分出土した。出土した土器には回転台成形土師器、黒色土師器、底部糸切り土師器、黒色土器、緑釉陶器、無釉陶器、灰釉陶器、須恵器、土鍾などが有り、多彩な内容のものとなっている。このうち実測の対象としたものは129点で、本小稿ではこの中よりさらに主要なものを50点選んで掲載した。

(1) 回転台成形土師器 (第3図①~⑳)

粘土紐を巻き上げたのち、低速回転台で成形した土師器の杯で、底部は原則として未調整、また体部の内外には成形時に生じた連続的なヨコナテの稜線が観察される。形態には大別して高台を有さない平底の杯Aと高台の付く杯Bとが有る。無高台の杯Aは、さらに次の杯A₁~A₃に細分される。杯A₁(①~⑦)は、安定した平底の底部より屈曲して斜外方へのびる体部を有し、口縁端部は丸くおさめている。杯A₂(⑧~⑪)は、形態は杯A₁と共通するが、口縁端部の処理がやや異なっており、端面が厚く平坦になっている。またA₁、A₂以外に、底部と体部との境界が強くヨコナテされて凹線状に窪んだものを杯A₃(⑫、⑬)とするが、量的には少ない。杯Bは、基本的には杯Aに高台が貼付けされたものであるが、若干杯Aとは異なる点も見受けられる。杯Bは、形態より杯B₁~B₄に細分される。まず杯B₁(⑭、⑮)は、体部は内彎気味にのびたのち口縁端部が軽く外反する。器壁も他に比べてやや薄手に仕上げられている。杯B₂(⑯~⑲)は、杯部の形態は杯A₁に対応するが、底部には厚手で断面三角形の高台が貼付けされる。杯B₃(⑳、㉑)は、杯A₂に対応する高台付の杯である。同様に杯B₄(㉒)も、杯A₃に対応する高台付の杯である。これらの回転台成形土師器(杯A、杯B)は、いずれも胎土は精良で焼成も良好、色調は明赤褐色を程するものが多い。一方量については、杯Aと杯Bとでは若干の較差が認められる。すなわち杯Aが口径12.5cm~13.5cm、器高3cm~3.5cmにあるのに対し、杯Bは口径14cm、杯部高3.5cm、高台



SD-07遺物出土状況写真

を含む器高4cm~4.5cmと、やや大振りのつくりとなっている。また形態についても杯B₁のように、高台付杯と言うよりはむしろ碗を意識した形態のものが見られるのも、杯Bの特徴の一つであろう。

(2) 黒色土師器 (第3図㉒・㉓)

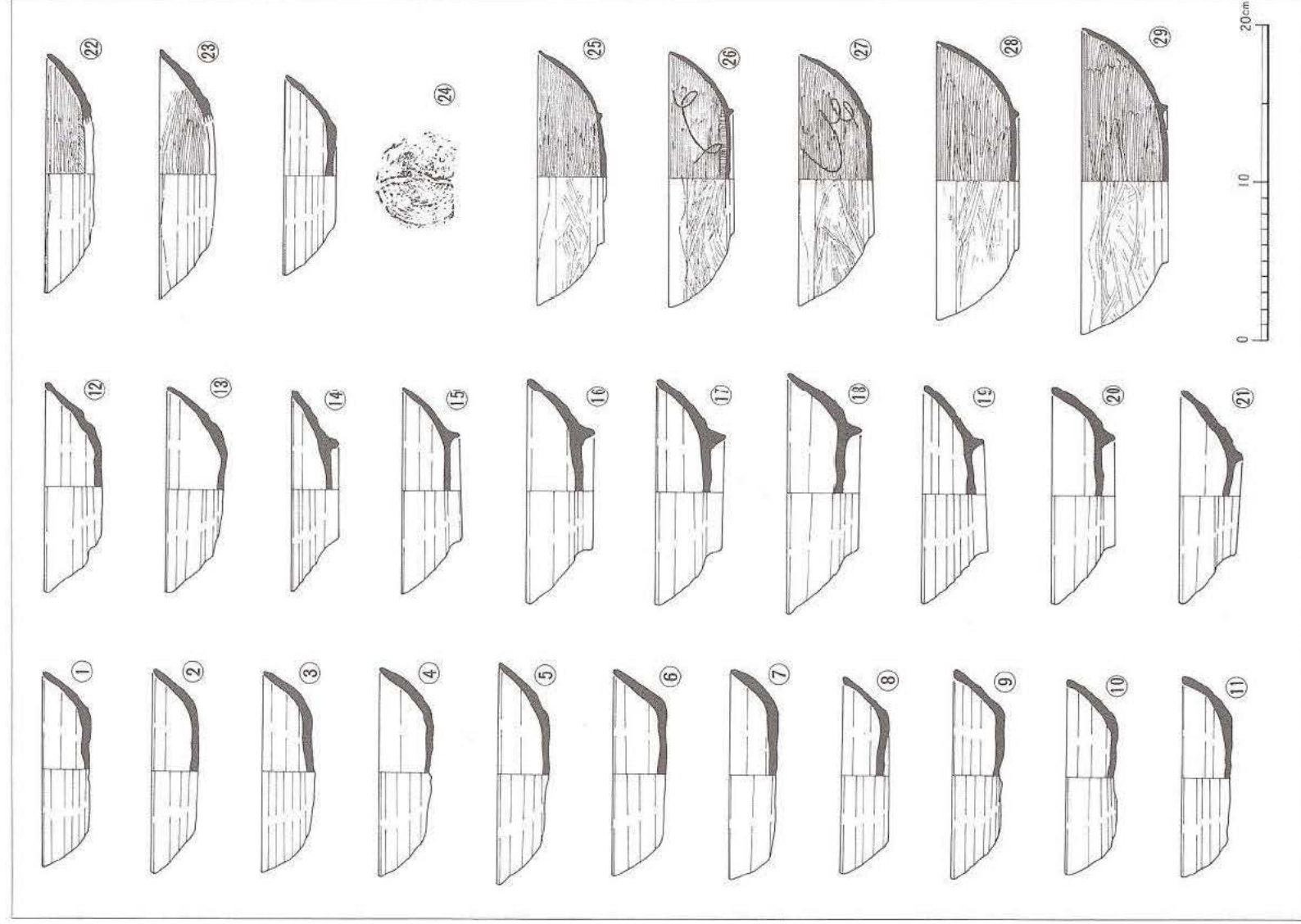
量的には稀少であるが、回転台成形土師器の内面を黒化処理した土器が若干量認められる。これを畿内系黒色土器と区別するため、黒色土師器と呼称する。いずれも破片での出土で、資料的な制約があるが、形態的には㉒、㉓とも平底で高台の付かない杯と思われる。成形手法や胎土などは、基本的には回転台成形土師器杯Aに類似するが、体部がやや浅く外方に開いており、これに対応して口径も15cm~16cmとやや大きくなっている。また内面は底部見込みも含めて緻密なへら磨きが施されている。なお今回は確認できなかったが、平底のものと同時に有高台形態のヴァリエーションも存在する可能性が高い。

(3) 底部糸切り土師器 (第3図㉔)

一点だけではあるが、底部に回転糸切り痕を残す土師器の杯が出土している。形態上は、回転台成形土師器杯Aに類似するが、口径に比べて底径がやや小さく、底部と体部との境界の稜線が明瞭である。法量は、口径12.8cm、器高3.3cmを測る。胎土、焼成ともに良好で、色調は明赤褐色を程する。底部に回転糸切り痕を残す土師器の杯は、近江では主に湖西地域で多くみられることから、同地域からの搬入品である可能性が高い。

(4) 黒色土器 (第3図㉕~㉙、第4図㉚~㉜、㉝、㉞)

9世紀以降10世紀に至る時期に、畿内地域で比較的通有に認めることのできる内黒の黒色土器が、本調査地SD-07から多く出土している。出土した黒色土器の器種には簡単な高台を底部に貼付けた杯形態のもの(㉕~㉞)、有高台の鉢(㉟、㊱)、甕(㊲、㊳)が有る。まず杯についてであるが、SD-07出土の黒色土器の杯は全て高台を有する杯Bで、無高台の杯Aは認められない。形態は、底径が大きく安定した底部より内彎しながら立ち上がる体部を有し、口縁部は軽くヨコナテされている。高台は低く、断面三角形の簡単なもので、底端付近に貼付けされるため、一様に高台径の大きなものとなっている。器壁はいずれも2mm~3mm前後に薄く仕上げられている。内面は底部見込みが平行、体部は横方向に緻密なへら磨きを施す。㉕、㉖については、さらに体部の内面に渦巻き状の暗文を施文している。また㉗、㉘については、口縁内端に一条の沈線を巡らしている。体部の外面は、全体を5~6分割して、粗いへら磨きを斜交させながら施している。またへら磨き以前にへら削りを加えたものも認められるが、痕跡が明瞭に観察できるものは少ない。色調は、



第3图 S D-07出土遗物(I)

内面が漆黒色から銀黒色、外面は明黄褐色から黄茶褐色を程するものが多く、いずれも胎土、焼成とも良好である。また法量には口径16cm・器高4.5cm前後のもの(②⑤~②⑦)を標準に、それよりやや小振りのものと大振りのもの(②⑧、②⑨)とが有る。なお③は口径10.4cm・器高2.9cmを測る小型の黒色土器で、この手の黒色土器は今回の調査では他に出土しておらず、ミニチュア的な製品と思われる。③⑪、③⑫の黒色土器は一応鉢に分類したが、平城Ⅵでは壺Aに分類されている。形態は、半球形体部に短く外反する口縁部を有し、底部には高台が付く。③⑪は、腰高で体部が強く内彎する形態で、高台も薄手のシャープなつくりのものとなっている。③⑫は、安定した平底の底部より体部が直立気味に立ち上がる形態で、高台は低く偏平である。両者とも底部外面を含めて、器表面の全面を緻密にへら磨きしている。法量は③⑪が口径15.4cm・器高8.1cm、③⑫が口径16.2cm・器高8.5cmを測る。胎土等は杯と共通している。③⑮、③⑯は、黒色土器の甕である。ともに破片ではあるが、形態的には球形体部に外反する口縁部を有する。また体部外面には煤の付着が著しい。口径は18cm前後であるが、この他にも口径の小さなやや小振りの甕も存在する。

(5) 緑釉陶器(第4図③⑬、③⑭)

S D-07からは緑釉陶器も出土しているが、量的には少ない。③⑬、③⑭はともに近江系と考えられる緑釉陶器の皿で、貼付け高台の接地面内端に段を有している。底径の大きい安定した底部より、体部が浅く斜外方へ直線的に開く形態である。内底面の底端に沿って浅い凹線が巡る。外底面は、③⑬の場合回転糸切り痕が残されているが、③⑭については痕跡が不明瞭である。焼成はいずれも軟質で、素地色は明黄褐色を程する。施釉は外底面を含む全面施釉と考えられ、釉調は淡緑色を程する。法量は両者ともほぼ同じで、口径13.5cm・器高2.8cm前後を測る。③⑬、③⑭以外の緑釉陶器は全て破片で出土しているが、硬質素地1点を除き他は全て軟質緑釉で、近江系と考えられる。

(6) 無釉陶器(第4図③⑰~④②)

形態には皿と碗の二種が有り、瓷器系の影響が強く看取されるが、灰釉等の施釉は認められず全て無釉であり、後述のように近江在地産の須恵器系の焼物である。皿(③⑰、③⑱)は、浅く開く体部に短く側方へ外反する口縁部を有し、底端には外方へ踏ん張る断面台形の高台が貼付けされる。また③⑰の外底面には回転糸切り痕がそのまま残るが、③⑱ではこの回転糸切り痕は丁寧にナデ消されている。法量は③⑰が口径13.4cm・器高2.7cm、③⑱が口径13.8cm・器高2.5cmである。一方碗には法量の違いにより口径14cm・器高4cm前後のやや小振りなもの(③⑲、④①)と、口径16.5cm・器高5cm前

後のやや大振りなもの(④①、④②)との二種が認められる。いずれも平坦な底部より体部が斜外方へ直線的ないし若干内彎しながらのび、口縁端部は短く側方に屈曲する。高台は皿と同様に外方へ踏ん張る断面台形のもので、底端に貼付けされる。また外底面の回転糸切り痕はそのまま残されているのが原則で、ナデ消しが施されているものでも、完全に消し去られていない場合が多い。これらの無釉陶器はいずれも砂粒を若干含む程度の精良な胎土を有し、還元焰焼成であり、色調は明灰褐色を程している。

(7) 灰釉陶器(第4図④③~④⑧)

形態には皿と碗の二種があり、碗は法量の大小によってさらに二分される。④③の皿は、薄手のつくりで浅く開く体部に短く外反する口縁部を有し、底部には三日月形の高台が付く。口径14.6cm・器高2.7cmを測る。一方④④の皿は、体部が内彎気味に浅く開き、高台もエッチの鈍いものが付く。口径15.6cm・器高3.3cmを測る。碗には口径15cm・器高3.8cm前後のやや小振りのもの(④⑤、④⑥)と、口径18cm・器高6cm前後のやや大振りのもの(④⑦、④⑧)とが有る。碗にはまた口縁部に輪花を有する輪花碗が含まれている。④⑤、④⑥はやや小振りの碗で、浅く内彎気味に開く体部に短く外反する口縁部を有し、底部には三日月形の高台が付く。④⑦と④⑧はともにやや大振りな法量の輪花碗で、体部は深く内彎気味にのび、口縁端部は心もち外反させておさめる。また④⑧の底部には、やや幅広で高い三日月高台が付く。輪花はいずれも口縁部を外側からへら先で押えて仕上げたもので、四面輪花と思われる。これらの灰釉陶器の外底面は全てへら削りないしナデ消しが施されており、回転糸切り痕は消し去られている。また施釉は全て漬け掛けである。詳細は未検討であるが、東濃系の製品が主体的であると思われる。

(8) 須恵器(第4図④⑨、④⑩)

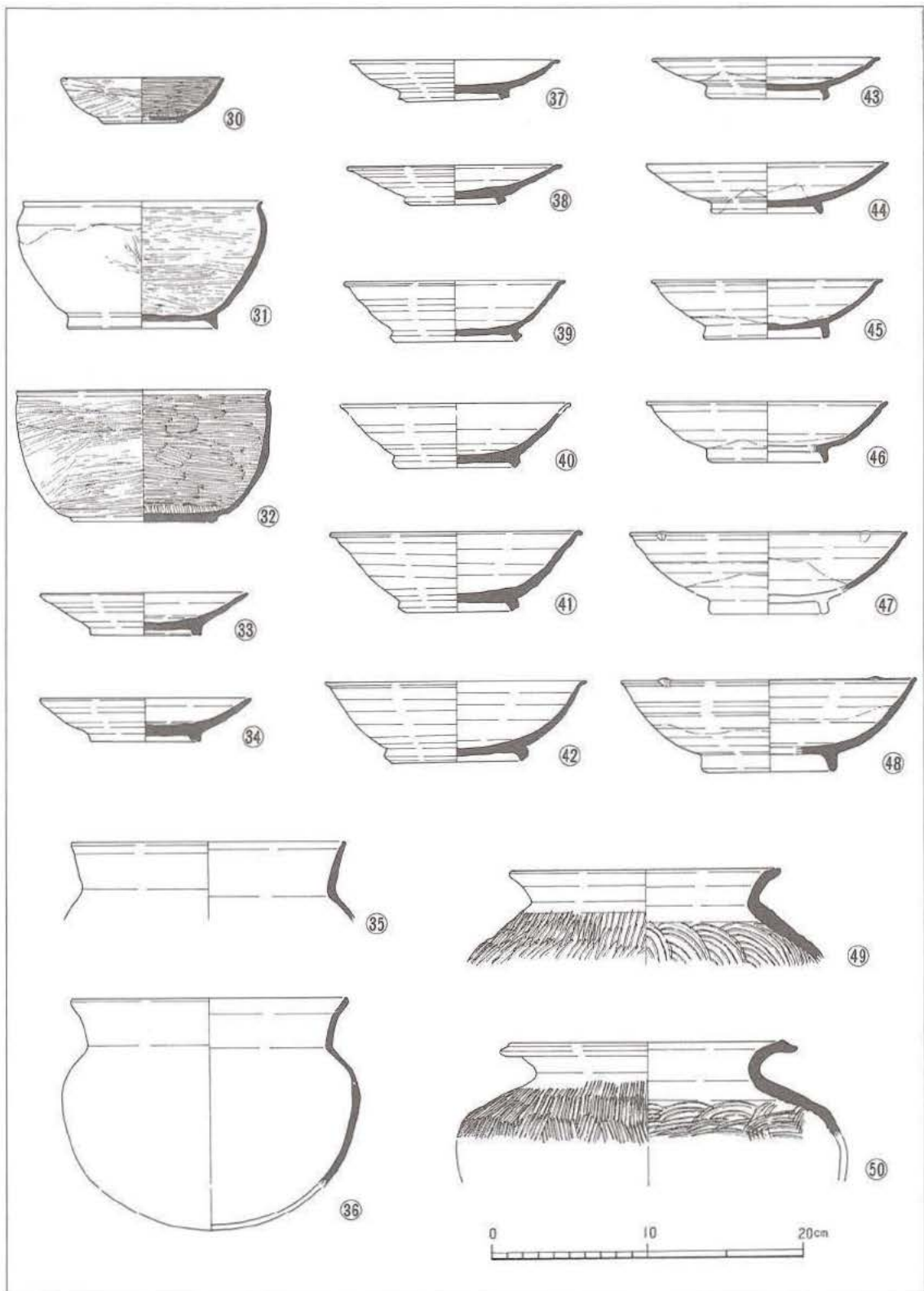
甕が数点出土している他、杯、長頸壺等の破片も若干出土している。甕は、口縁部が短く外反するもの(④⑨)と、口縁部をさらに強く屈曲させ、端部が側方へ突出するもの(④⑩)とがあるが、基本的には類似した形態のものである。また体部外面には成形時の平行叩き目があり、内面には同心円状の当具痕が残る。

(9) その他の出土遺物

以上の遺物の他に、土師質の土鍾が5点出土している。また今回は紹介しなかったが、出土遺物中には十数点の墨書土器が含まれている。墨書土器には「今西□」、「内」、「女」などが有る。墨書される土器には黒色土器、無釉陶器、灰釉陶器とが有る。

4. 小 結

まずS D-07出土土器群の所属時期について検討する。出土遺物には在地系と搬入系の二者があるが、前



第4图 S D-07出土遗物(II)

者については今だ年代観が確立されていないため、対象から一応除外し、後者の搬入系に分類される畿内系黒色土器と灰釉陶器を検討する。まず黒色土器についてであるが、本例では体部の深い杯の形態をとり、底部には全て簡単な高台が付き、無高台のものは認められない。このような有高台の杯Bは、平城京東三坊大路側溝S D-650 Bより増加する。(註1) また平安京出土例では、10世紀初頭とされる北野庵寺S K-15に並行する。(註2) 滋賀県下では、貞観15年銘(873)の木簡を伴出した鴨遺跡の出土例に後続する位置を占める。(註3) 一方灰釉陶器は、O-53の中でも最も古相を示す時期の所産であると考えられる。以上よりS D-07出土土器群を、10世紀第1四半期を中心とする時期に捉えておきたい。

次に器種構成について若干の検討を加える。まず土器の実測点数を仮の目安とした場合、S D-07では回転台成形土師器の杯が、過半数に近い40%前後を占めている。(杯Aと杯Bとの比率は2:1程度)、次いで畿内系黒色土器25%、灰釉陶器15%、無釉陶器10%と続き、緑釉陶器などその他の土器は各々5%に満たない。またS D-07出土土器の場合、大半が供膳形態土器で占められており、それ以外の土器、特に煮沸形態の土器は、黒色土器の小甕を除いて、全くと言ってよい程認められない。これは遺構の性格や出土状況によ

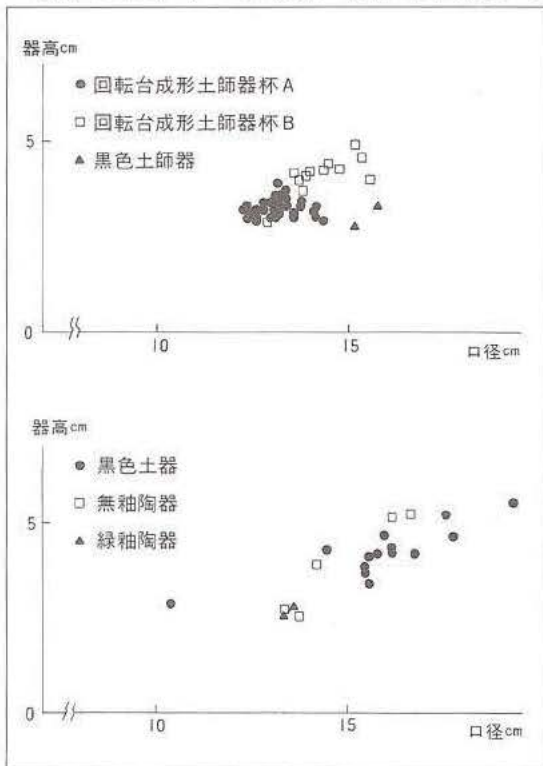
っても変わろうが、器種組成に占める煮沸形態土器の低調さは、この時期の一つの特徴であると思われる。なお主要土器の簡単な法量分布図(第5図)を添付したので、あわせて参照されたい。

以上の諸点より導かれることには、まず器種組成に須恵器の杯が認められず、かわってこれを補完して回転台成形土師器の杯が多量にみられる点が挙げられる。このことより、近江では10世紀には須恵器生産が終焉していたものと理解される。この時期以降10世紀代を通じて、近江では回転台成形土師器の杯が盛行する。次いで出土量の多い畿内系の内黒黒色土器であるが、器種組成において常に一定量を占めていたかについては、在地生産の可能性(註4)を含めて、今後の類例検討をまちたい。灰釉陶器は、近江ではこの時期以降出土量が増加し、10~11世紀を通じてかなりの量が搬入されている。最後に、無釉陶器については、これまであまり注意されることがなかったが、近年集落からの出土資料も増加している。特に須恵器生産の消滅以後も、統須恵器とでも呼称される須恵器系の焼物が、小規模ながら生産されていたことを証左できるのは、後の緑釉生産の成立を考えていくうえでも、貴重な知見であろう。

5. おわりに

12世紀以降の近江では、黒色土器等に地域色を有しながらも、大きくは椀、皿からなる畿内的な土師器系土器の生産域に属している。しかしそれ以前の9~11世紀には、東国的とも言えるかなり多様な須恵器系の焼物を認めることができる。既に述べた回転台成形土師器や底部系切り土師器、無釉陶器などがこれに相当し、広義には近江系緑釉陶器もその延長上に位置付けられよう。しかし、これら古代末から中世にかけての過渡期を司る地域色豊かな焼物について、近江では緑釉陶器を除き、これまであまり注意されることがなかったと言えよう。このような中で、下々塚遺跡S D-07出土の土器群が、これを補う一つの示標ともなれば幸いであるとする。

(森 隆)



第5図 S D-07出土遺物法量分布図

註1. 「平城宮発掘調査報告VI」、奈良国立文化財研究所 1974

註2. 「北野庵寺発掘調査概報 昭和57年度」、京都市埋蔵文化財研究所 1983

註3. 兼康保明「滋賀県鴨遺跡出土陶器」(『愛知県陶磁資料館研究紀要2』) 1983

註4. 堀内明博「平安時代中、後期の畿内の土器組成(1)―滋賀県における畿内型土器の動向―」(『中近世土器の基礎研究II』) 日本中世土器研究会 1986